

# みつばっちっち の冒険



ぶんぶんぶん  
ぼくはみつばちっち  
いつもはミツをあつめてる

でも今日は特別な日  
あの丘の扉が開いたから

扉が開いたら  
冒険に出かける日

だからみんなにお別れをしに  
今日はぶんぶん  
飛んでいく



「うさぎさんさようなら」

「うん！元気でね！！」

「しまりすくんさようなら！」

「いってらっしゃい！」

「天使さんさようなら！」

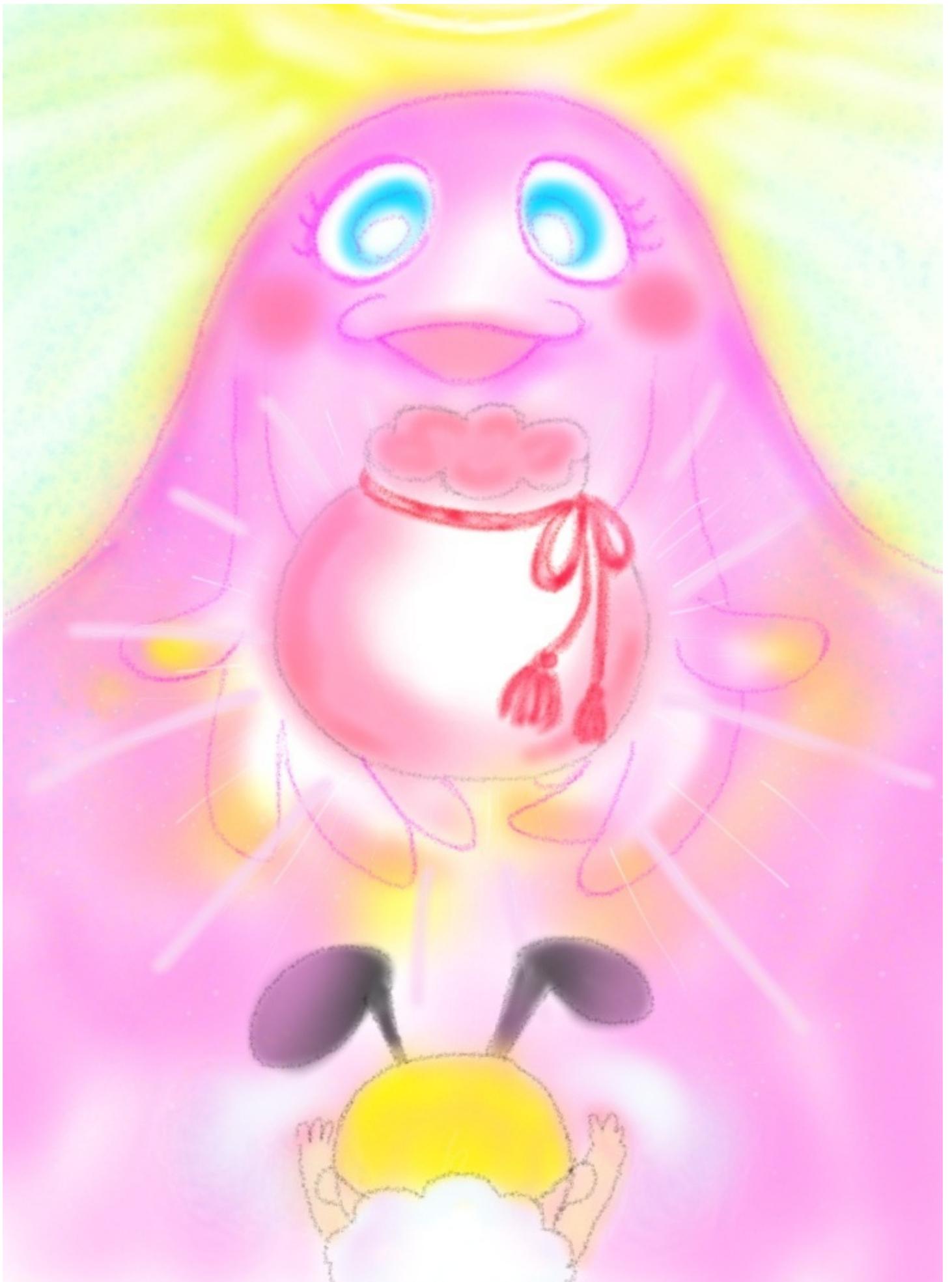


「お待ち、みつばっちっち。君におみやげがあるよ」

「なんだろう。天使さん」

「ほら、君がほしがっていたものだよ  
うまく使いきっておいで。君だけのものだから」

「うん。ありがとう天使さん。いってきます」



扉があいたらむこうへゆく日

ぶんぶんぶん

僕はたくさんの友達にあいさつをする

最後は森の奥のクマさんのところ



「こんにちは！クマさん！！」  
「やぁはっち、お別れみたいだね」

「そうなんだ」  
「きっと楽しい冒険になるよ」

「ありがとう。でも僕はとてもこわいんだ  
ねえクマさん

「ぼくはどうして  
あっちに行かなくちゃいけないの？」



「そうだね。はっち

君がそう思うのも無理はない

ねえ、はっち。たとえば

葉っぱは自分の落ちる日を知っているんだよ」



「その風がきたら  
安心して身をゆだねる

おそすぎず  
はやすぎず

その風にのるんだ」

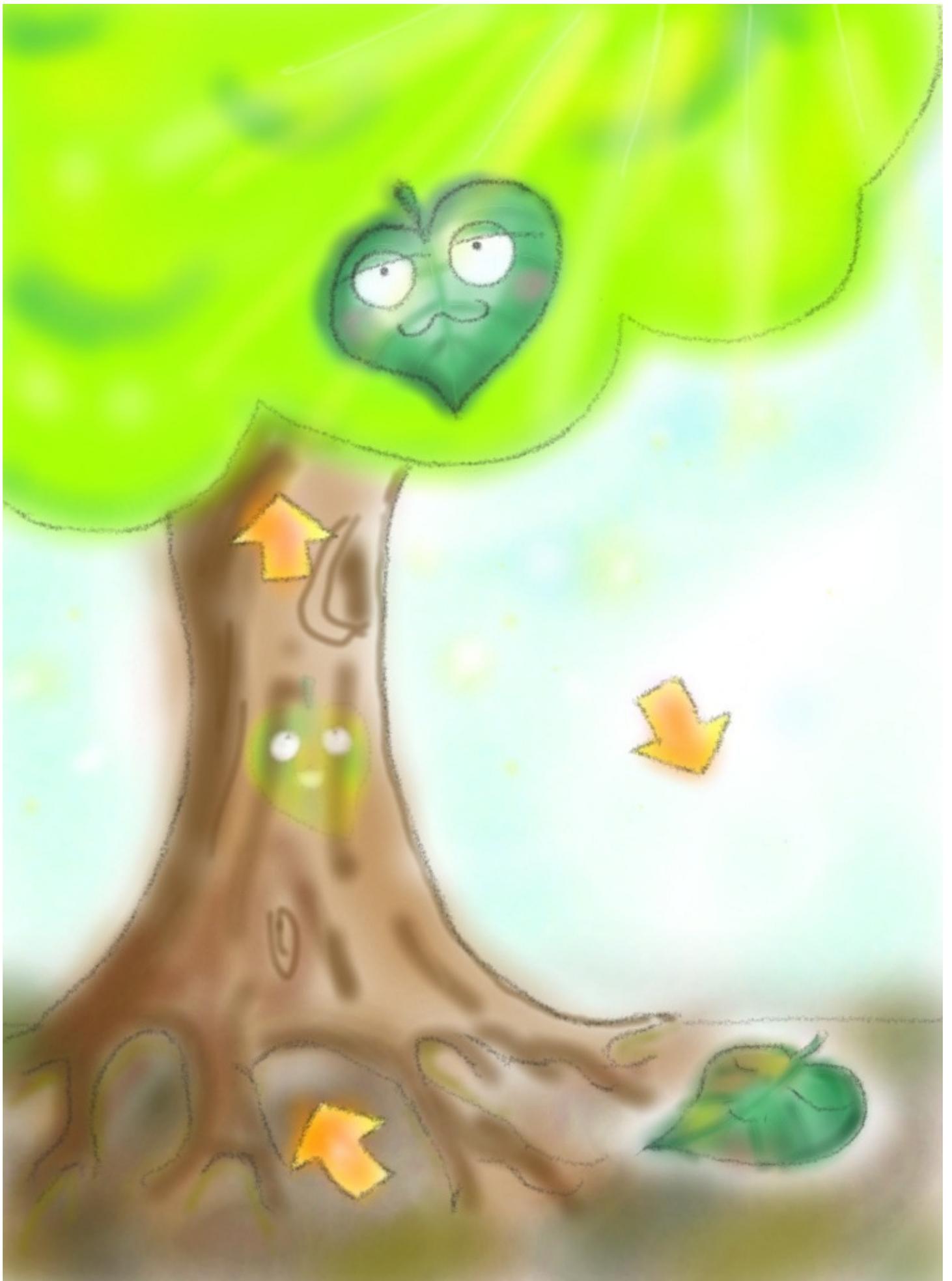


「おち葉になったら

大地にゆっくりかえっていく

そしてまた木の一部になって

また葉っぱになってかえってゆく



木はうごけないが

僕らはうごける木のようなもので



ちよつとずつ

根っこでつながっている



さっきまで僕のなかにあった空気が

いまは君の中にある



ねえはっち

君があつめたミツは

そのまえは葉っぱであり

木であり 花であり

雨であり 海であり

もしかしたら僕なんだよ



僕らはちょっとずつ

いろんなものわかちあいながら

一つの世界にいる」



「じゃあ、君とぼくのさかいめはないの？」

君は僕だし

僕は君？」



「いや、はっち

きみをつくるのは

きみの考え方

そしてきみの思い出

それがきみにあるから

きみとぼくはちがうものになる



僕からみたきみはこうだし

きみからみた僕はこうだろう？



ぼくらはちょっとずつつながっているけど

かんがえかたや思い出で別になるんだ

ぼくの思い出をきみがすべて知らないみたいに

でも感じるにすると

ぼくらはひとつなんだよ」



「目をとじてごらん はっち  
なにを感じる？」

「クマさんを感じる

風を感じる

木のざわめきを感じる

波のおとを感じる

かぜが僕の中を通り抜ける

僕がかぜを通り抜ける

風と僕が混ざるところがある・・・」



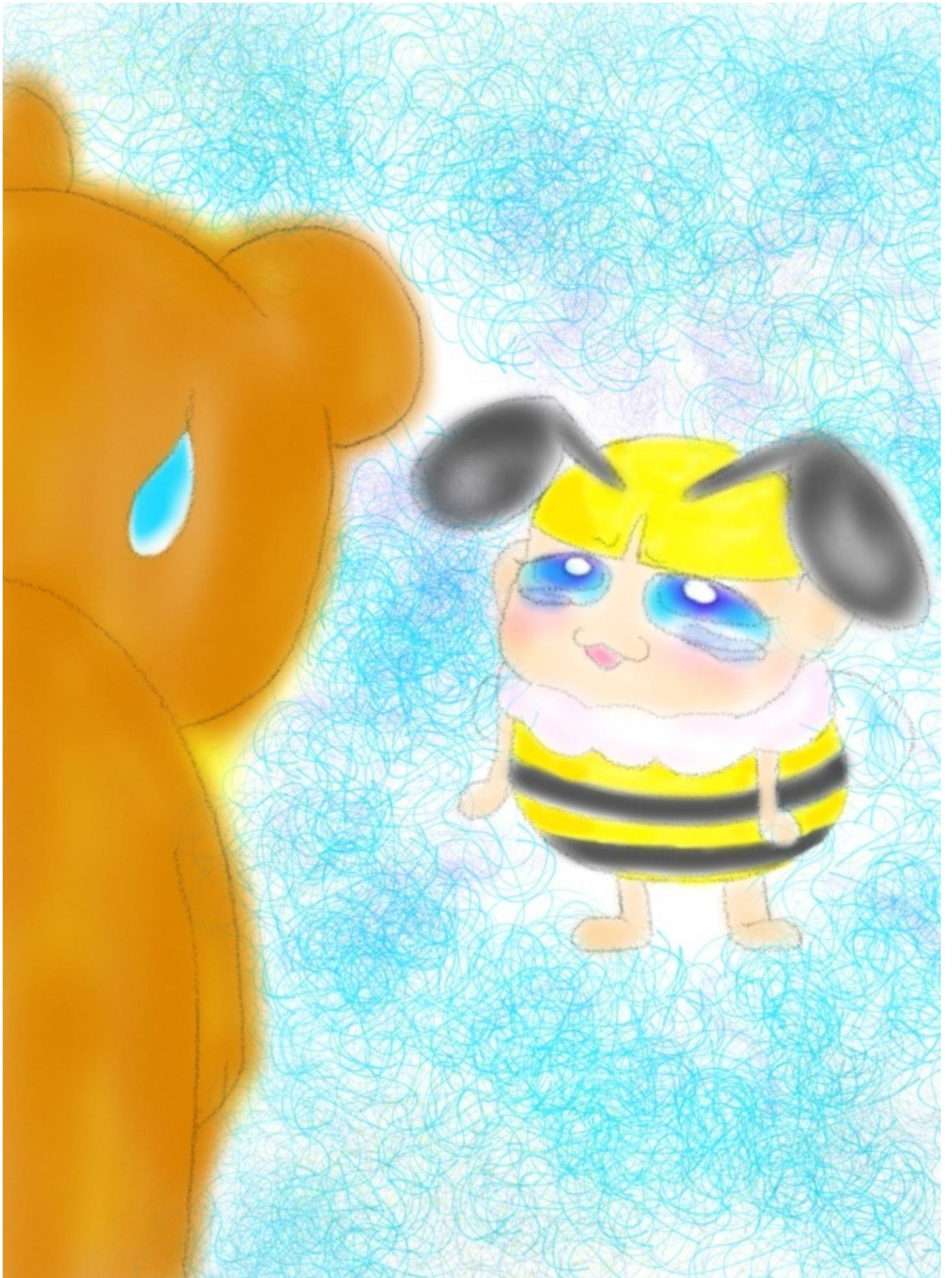
「ああ　そういうことか・・・」

「わかったみたいでよかったよ」



「ああクマさん  
ぼくはそろそろ行かなくちゃいけない

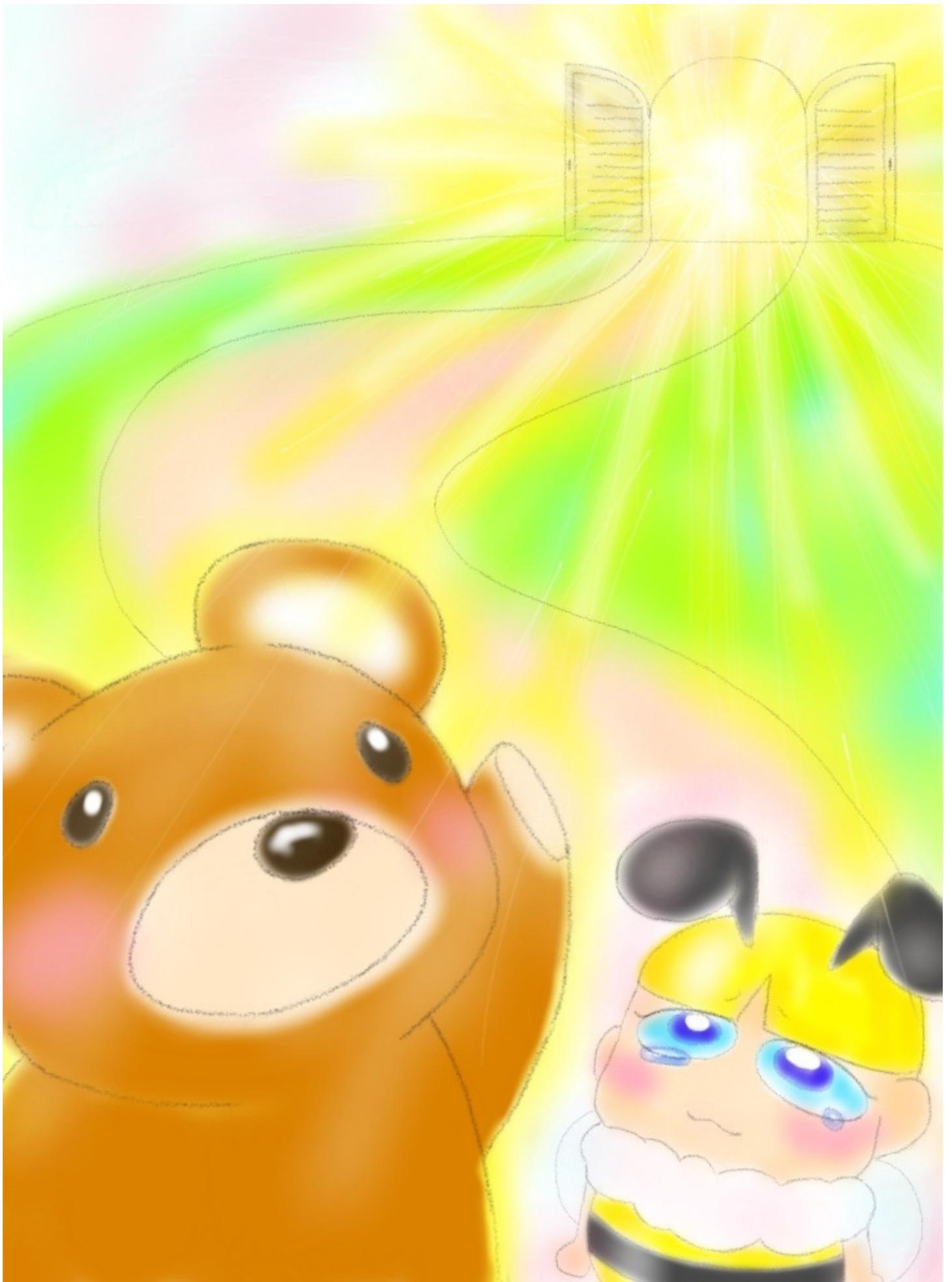
ねえクマさん  
いっしょに行くことはできないの？」



「あの扉がきみだけにあいたなら

その道はきみのものだよ

さあ、次の冒険にいておいで」



「ああ  
ぼくは知っているんだ  
次の冒険のために

ぼくはきみをわすれる  
ぼくはそれがこわい」



「いいじゃないか  
僕がおぼえているし

君はかえってくる

木の葉がまたおちてかえってくるように」



「きみはきみだけの

特別なおみやげをもっていくんだらう？

今回はにぎやかでたのしそうなおみやげだね」



「僕はつぎはたくさん歌をうたってすごしたくてね

天使さんに歌をたくさんもらったんだ

それとたくさんのお話と」



「きみはぼくのことをわすれるけど

ぼくはきみをおぼえているよ

きみはぼくであり

木であり 風であり

山であり 海なんだ

ぼくときみはつながっている」



「そうだね

ぼくはきみにまたあいたい

ぼくときみとはつながっている

きみはぼくをわすれない

ありがとう・・・

それじゃあいつてくるね」



「いってらっしゃい 気をつけておゆき」



君はいろいろ体験して

またもどってくるだろう

それは  
君の一生であり

僕の一瞬のできごと

僕がみおくるのは  
ここまで

僕はここからでられない  
僕の時間はここにあるから

扉のむこうは

地球がある



君はそこで

オギャアと生まれる

君はとても歌がうまくて

まわりの人を喜ばせる

君はとっても冗談がうまくて

まわりの人を笑わせる



きみはこの花畑から地球をのぞきこんで

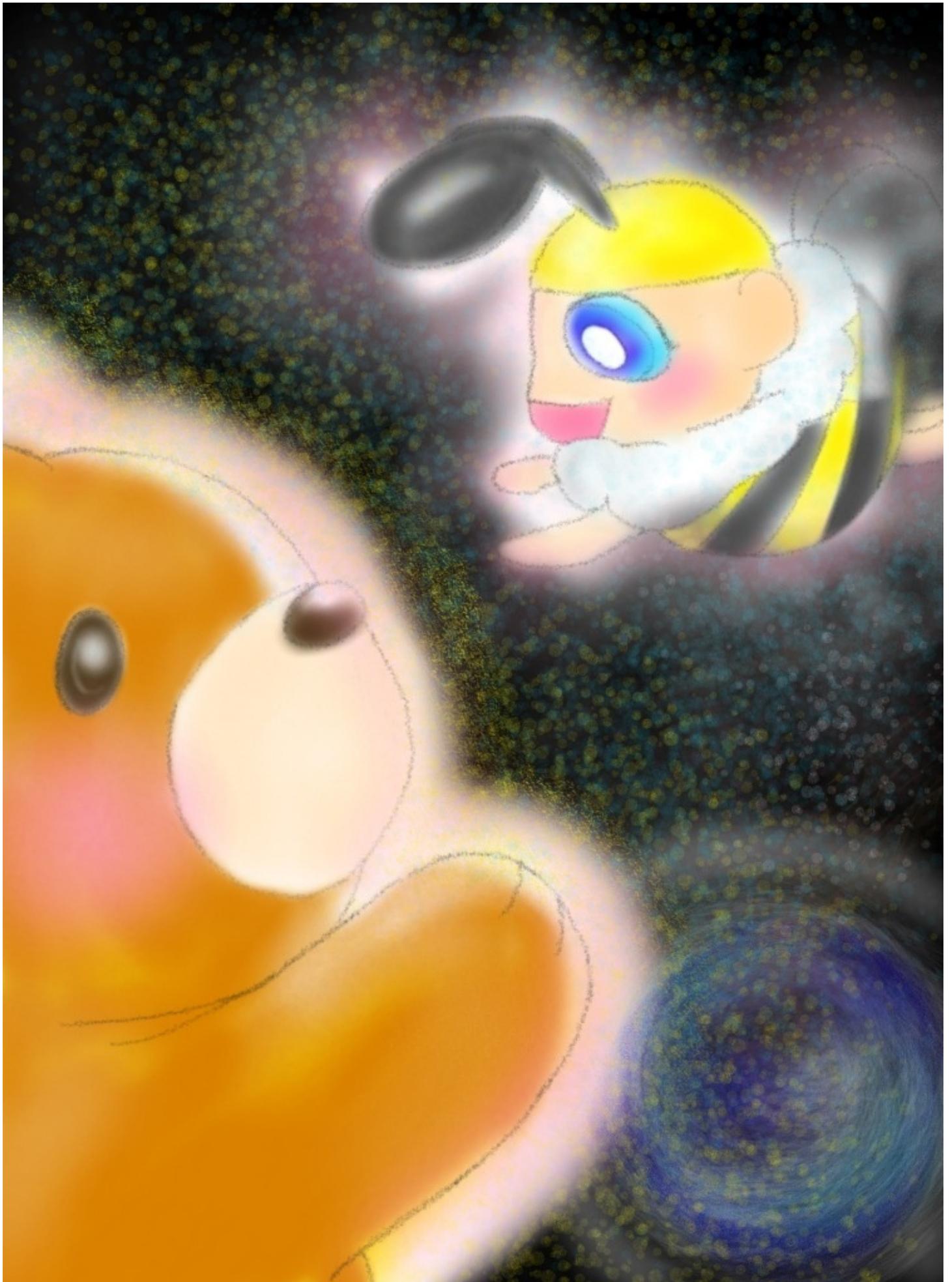
きみのお父さんとお母さんをえらんだ



きみはぼくのことを忘れて

地球で生き学び笑い

そしてまた戻ってくる



そしてまたその記憶は

僕らとわかちあわれて

僕らの一部になる

葉が落ちて

また木の一部になるように

いってらっしゃい

いってきます

ただいま

おかえり

きみをおぼえてるよ

